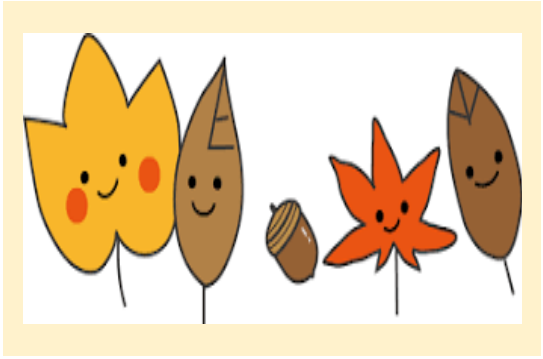
# 文芸サロン作品集



2023 年 10 月

シニアネット福岡

（SNF）

文芸愛好会

# 短歌

宮　由枝

幾世経て曲れる松の並木道打ち寄す波の音新しき

老松と若松並木はろばろと木蔭ほのかに松脂にほふ

苔青く読めぬ石碑のかたはらに並ぶ地蔵の前垂れ赤し

カンツォーネの愛のソプラノ歌ふ人抜ける白さのあぎと震はせ

プラタナスの太葉かわきし並木道枯葉ふむ音も秋深く澄む

墓地に冷え下る山里風やさしたんぽぽ綿毛を躍らせにつつ

いろ変りするとふ薔薇の一本の終りは真紅の花びら散らす

この秋も主なき家の高枝に割れしざくろの赤実光りぬ

# パワハラまがい

山本　為三

こんな上司がいた。その部で一番若手の男性社員に近づき、その肩をたたきながら「メロンありがとう、うまかったよ」よくとおるその声は全員の耳に届いた。上司からお礼を言われた社員は顔を赤らめながら下向き加減で机で仕事を続ける。

時は中元シーズン。彼が上司に中元を贈ったことがみんな知るところとなった。サラリーマン社会ではお中元やお歳暮を上司に送ることは別に珍しいことではない。がそれは隠密にどちらかと言えばこっそりと行うのが常識。めったに口に出さない。お礼は礼状はがきで、が一般的。であるのに、その上司は仕事中の職場でみんなの前でそれをバラしまった。

その上司と懇意な関係でしたので後日、あれはちょっと残酷ですよといさめた。彼は言った。「お中元のルールは知っているよ。みんなに聞こえるように言ったのは俺に忠誠を誓って中元を贈ってくる者がいることをみんなに知らしめるためだよ」と。

この上司、なにしろ出世欲満々のタイプ。みんなの前でカバンを見せながら「この中に君らの人生を決める大事なものが入っているんだ」とカバンをたたいたりする。人事考課の書類が入っているという。これを持ち帰って今夜みんなの考課表を書き上げるんだと一人でつぶやいている。つまり、自分には人事権があり俺の筆先一本で君らの昇格昇進転勤が決まる・月給も決まる。よって家族ともども今後の人生が決まる……と言いたげな振舞い。

人事異動で転勤してきた部下、あいさつに来る。キャビネットを開けて「手紙がいっぱいあるだろう。みんなからの手紙だよ。不平不満が満載。これを読むとどこのだれが何をしているか全部わかるんだ」と自慢げにのたまう。

若手の結婚。仲人は俺が引き受けるよと押し売り、部下の結婚式も出世に利用する。仲人の条件として専務の〇〇さんを主賓で呼べとまるで業務命令。その夜は専務とじっくり飲み明かそうと目論んでいるらしい。

当時、パワハラということばなかった。この上司の振舞はいかがなものか。

バカヤロウ、死んでしまえ、いやならやめろなどなど。草野球のコーチ監督から職場の上司、先輩。自分が上位にあるとか優位な立場にあると、言いたい放題、感情のおもむくままに発言する。子供たちに野球が好かれなくなった原因の一つにコーチ監督たち大人の言葉遣いの荒っぽさにあるといわれている。品格の無さ、ガラの悪さは子供を苦しめる。相手が抵抗できない、口答えしない、いやいやでも従う、職場のパワハラはこの典型。メロンありがとうの上司、バカヤロウの発言こそなかったが部下の人格など眼中にない威張り屋、偉ぶり屋だった。

月日が経ってぐっと後日、　職場の退職者懇談会があった。四十人ぐらいの座敷での大宴会である。あの元上司も顔を見せた。座敷宴会独特の差しつ差されつが始まる。にぎやかに近況を語り合い昔ばなしに爆笑する。退職者の宴はとかく騒がしい。ところがあの元上司に近寄る人がいない。だれも話しかけない。何人かはちらっちらっと視線を送るが近寄ろうとしない。元上司は約一時間半、ひとり配膳の前で口を動かしていた。

## 紙　袋

山　本　　為　三

紙の袋、デパートの紙袋の愛用者である。別に宣伝係しているわけではない。とにかく手ごろである。大きさと言い容量と言い、マチの幅と言い使い勝手がいいのでついつい持ち歩く。

ただし使用期限がある。せいぜい三回か。四～五回となるとしわが目立つ。何しろ紙製品。

しわが入るとやけにみすぼらしくなる。デパートの袋であるだけにみすぼらしさが一層目立つ。貧乏くさくなる。たまにデパートで買い物したんだろうから大事に使ってますねと、冷やかされるのがオチ。

確かにおばあさんがいとも大事にヨレヨレのデパートの紙袋を使っていらっしゃるのを目にすることがある。どう見ても十回は使っているなあ。底にテープを張って破れないようにしている。デパートの社長はそんなにご愛用いただきありがとうございますと礼を言うべきかも。

若い女性にはデパートより有名ブランド商品の高級紙袋が似合う。化粧品や装飾品が入っている。小型でデザインが洒落ている。ちょっと贅沢しましたと買ったばかりの誇らしげな表情に似合う作りになっている。いや、こんなのはごく当たり前のことですよ。誇らしげなんて。袋は自分の部屋のどこかに突っ込んで二度使うことはありませんよとこともなげ。

デパートの紙袋をなにかとありがたがっているのは昭和の生き残りだけかな。

# こんな一日がありました

山本　為三

バスに乗ろうとした。ステップが高い。いつもヨイショの掛け声で両足をステップにのせるがその日もう一本の足が上に上がらない。もう一回やってみたが失敗。と後ろから腰のあたりを押してくれる人がいる。難なく両足がバスに乗った。とっさにありがとうと叫ぶ。

親切な人もいるもんだ。見たら五十歳くらいのおじさんである。何となくさえない風体、なんどもお礼をいった。声を出してお礼を言った。おじさんはバスに乗らない。行き先が違うらしい。座席に座ってからも窓ガラス越しに頭を下げてお礼をした。おじさんは全く知らぬ顔、無視するように横を向いた。

百円ショップでカレンダーを買った。やや大型のを二つ。店員さんが二つまとめて、これを丸めて輪ゴムをかけてくれた。丸められたカレンダーは輪ゴム一つでは大人しくしていない。丸められているのに抵抗して広がろうとする。輪ゴム一つじゃ力が弱い。レジのそばのテーブルで丸めたカレンダーを手提げ袋に入れようと悪戦苦闘。と、店員さんが駆けつけて輪ゴムをもう二本持ってきてくれた。さらに別の店員さんが三つ持ってきてくれ輪ゴムは全部で六つ。これでカレンダーの抵抗を押さえつけられた。

カレンダー二つを買ったものの収納に手間取る老人。オタオタ。見るに見かねた店員さん二人、輪ゴム持参で助け舟。その日二つ目の親切にホロリ。

夕方、スーパーで買い物、レジを済ませて自分のバッグに詰め込もうとズボンの右ポケットから袋を取り出した。そのとき、ズボンのポケットに入れていた小銭五～六個がばらばらと床に零れ落ちた。瞬間、目で硬貨の行方をチェックしたがとても追いきれない。百円と十円と一円である。まあ後でゆっくり探そうかと横着なことを考えているとなんと周りにいたお客さや子供が駆け寄ってきた。ここにあった、ここにもあったと小銭を手渡してくれるではありませんか。スキ間に手を突っ込んで、はいこれもと一円硬貨を渡してくれる主婦らしき人も。ありがとう、ありがとう、すみませんの連発

一日に親切話が三つ。こんなことがあるんですね。心温まる気持ち、親切を味わう貴重で得難い経験でした。

# もういい加減にしたら……

山本　為三

何年か前に七十代を過ぎて次の大台乗りました。この大台、響きがあんまりよくないですね。いかにも老という文字が問答無用で迫ってきました。イヤだねと駄々をこねておりました。まるで無駄な抵抗です。八十は八十、九十は九十なんだよね。老は老らしくひっそりと世間の隅っこで、人目につかないところで遠慮がちに息をしてればいいのよ、か……。

過日、スーパーで食料必需品を買った。けっこう重たかった。それをリュックに入れて背負った。けっこう重たかった。スーパーを出たところに五、六段の階段がある。二、三段降りたところでリュックがご主人様の体をうしろに引っ張る。階段の途中で後ろに倒れそうになった。幸い後ろの人が背中をぐっと支えてくれてセーフ。いや、体は完全に倒れていた。支えがなければ頭を痛打したかも。

リュックに何やら詰め込んだ爺さんがヨタヨタの足取りで階段でひっくり返っていたよ。目撃者たちの土産話になるところ。かっこ悪かった。リュックの中には牛乳、大根、キャベツ、リンゴその他が入っていました。リュックをかついだ瞬間、ちょっと重いなあとイヤーな気分でした。この程度でヨロヨロするかな、まあなんとかなるだろうと得意の横着心と根拠なきおのが体力買いかぶり。これが見事に失敗。

そもそもリュックを持つようになったのは手提げバックより荷物の運搬には楽だろうと思ったから。お米五キロを時々買う。持って帰るのにスーパーのビニール袋だと手がしびれそうになる。五、六分歩くのに右手左手一分交代を繰り返す難行苦行。手もしびれる。

リュックを使うようになってこれは楽ちんと悦に入っていた時に転倒未遂事故を起こした。無理はできませんねとの警告、横着厳禁の天の声、廃車寸前のボロ車、自覚が足りない。

うつむき気味に針仕事。よだれが落ちた。口を開けていたらしい。寝てもいないのに昼間によだれが落ちることが時々ある。何らかの作業に熱中している。どうやらポカーンと口を開けているらしい。よだれが垂れているのは結構長時間のポカーンらしい。ちょっと格好悪い。家の中でしたのでささやかながら持ち続けているわずかな名誉と誇りに傷はつかなかった。まさか気が付かずに街中で口を開けていないだろうね。老化現象は忘れているうちに発生しておりますよ。

下半身に力がない。足腰は言うに及ばず、じつは腹部に力がない。汚い話でもうしわけありませんが、おならのことです。出そうで出でない。出そうと力むが出ない。何度かこころみていたらやっと出た。音は出ません。いや、かすかに何か響くものがありました。遠慮がちにちょこっと空気が出た、いや漏れたという感じ。大腸筋、い

や肛門筋に元気がなくなっています。ひと昔前なら……老化はうら悲しい。さびれゆく山村風景を思う。

またスーパーの話。レジで並んでいるとき、買った商品を眺めているうちに買いすぎたなあと後悔することがある。つまりトータルの目方、もっと軽くしようと思いつく。牛乳とかキャベツとか料理酒、玉ねぎ三個とか。店員さんにカゴをわたすとき「すみません、これは除外してください、ちょっと重いので」と言い訳をする。リュックにしろ手提げにしろ、重さに耐える気力と体力がないのである。無ざまなおこないがふえております。

目下、徘徊老人。俳諧ではなくウロウロさまよう如くの徘徊。幸いなことにちゃんと家には帰ります。帰宅する時間もおよそのところ自分で決めます。この徘徊、三千歩で確実にしんどくなります。歩きながらどこか座れるところはないかいなあと目をキョロキョロさせます。場所にもよりますが道端には案外座るところがありません。スーパー、デパート、量販店……時間つぶしの適地もしっかり歩いてモノを買いなさいと言わんばかり老を座らせない。

煙草を飲んでいたころを思い出す。人さまの家や会社にお邪魔すると、まず目をキョロつかせるのは灰皿はどこにありやなしや、でした。これと同じ。イスはないか、腰掛はないか。なにしろわたしゃへとへとに疲れております。

## 読後感

手柴　正義

山本さん投稿の「もういい加減にしたら……」を拝読させて頂きました。なるほどと想うこと山ほどあります。

買い物の苦労、私も……です。

重さ五キロ以上になると、途中で一、二度休まないとマンションまで体力がもたなく成りました。

佐記は十月四日日経新聞掲載の記事です。

「樋口恵子流九十歳から心豊かに生きる『八ヶ条』です。転記・紹介します。宜しかったら話題に下ください。

（樋口恵子さん　評論家、１９３２年生まれ・九一歳）

１）「モノは捨てない」

２）「おしゃれ心を忘れない」

3）「たわいもない話をする・筆まめに」
4）「猫を愛する」
5）「社会に関心をもち続ける」
6）「花を愛（め）でる」
7）「なるべく自力で歩く」
8）「いつまでも食いしん坊」

その他

・時間は矢のごとく過ぎ去って行く、やりたいことがあるなら今すぐ始めなさい。

・同世代の友人をなくすことは、寂しいが、長生きの税金だと思う。

以上です。

## 積年の旅

三島　武

最近の天気予報の当たる確率は、随分良くなった。

梅雨時の晴れ間予想を信じて、かねてから行きたいと思っていた甑島に、女房と二人で旅することにした。スケジュールを考えるうちに、この機会に甑島へ渡る薩摩川内に前泊して、「曽木の滝」と「沈壽官窯」にも行きたくなった。

曽木の滝は、地元の観光ガイドによると「東洋のナイアガラ」と称され、滝幅百二十メートルは、日本一だそうだ。この滝の一・五キロ下流には、ダムに水没しながらも、今もなお明治の面影を残す曽木発電所の建物が、渇水期には姿を現すという。カメラを始めた頃から一度は訪れたいと思っていた。

沈壽官窯には、私が生きているうちに必ず行かなければ……と心に決めていたところである。

四十六年前の十四代沈壽官氏との出会いが、そのように決意させた。

一九七七年に糸島青年会議所は、日本で六二二番目の青年会議所として誕生した。その年の認承証伝達式式典の記念講演の講師が十四代沈壽官氏である。当日、私は講師の出迎え役を担当。出迎えの博多駅から式典会場の糸島高校までタクシーに同乗した。

「地の虫の声」を聞きながら「練り・ろくろ・たたき」などの製法で焼き物作りをしている事など、気楽に一時間ほど話してくれた事が今でも鮮明に思い出される。二〇一九年、九十二歳での訃報で十五代の顔写真と並んだ姿に接したとき、訪問が遅きに失したと思ったほどである。

六月十六日、朝九時ごろ家を出て、新幹線で十二時前に川内駅に着いた。駅前のレストランで昼食を済ませ、予約していたレンタカーを借りて、係員に「曽木の滝」をカーナビにセットして貰った。

さぁ、出発だ……と快調に小一時間ぐらい走ったころから、だんだん不安になり出した。方角がどうもおかしい。川内川の上流に向かうはずなのに、出水市に入った、更にカーナビには水俣方面に案内している。とうとう我慢出来ずに車を止めて、カーナビを点検したが、確かに「曽木の滝」になっている。しかも、まだ一時間ほどかかるようだ。どう考えてみても腑に落ちない。

念の為に再セットしてみることにした。今度は住所の鹿児島県伊佐市大口宮人を入れてみた。すると方角線が大きく右斜め後方を示している。到着時間を見ると更に一時間かかる。よく見ると方向的にはこれが正しい。これを目的地にして新たな気持ちで走り出した。一時間半もの時間を浪費したことになる。

女房がスマホで調べたら、「曽木の滝」という料亭が水俣にあるのを発見した。レンタカー屋のセット間違いに怒りを覚えたが、ダブルチェックしなかった結果だ、と反省もした。女房は、車を返すときに一言二言言ってやる、と怒りが収まらない。

苦労してたどり着いた「曽木の滝」は、横の広がりといい、水量の多さといい、一度は見る価値はあるなと思った。だが、本場のナイアガラを直に見た者にとって、東洋のナイアガラと呼ぶにはふさわしくないと思った。下流の曽木発電所跡は、六月は渇水期であり、中世のヨーロッパ風の居城跡を思わせる煉瓦作りの建物が姿を現していた。

時間を節約して、滝を見終えると、既に十五時半になっていた。

沈壽官窯まで、ナビは一般道でも遠廻りの高速道でも一時間強かかるらしい。閉館の五時までギリギリだ。

予定通り向かうか？　止めるか？　考えた。ここまで来て諦める事は出来ない。間に合わなければ外から眺めるだけでも……と、意を決し向かうことにした。

遠回りしても少しでも時間が短縮できるようにとナビを設定し、横川から九州縦貫道に乗り鹿児島市へ、更に南九州西回り自動車道に乗って美山ＩＣ経由で四時半前に着いた。

四百年の歴史を思わせる樹木の中にある工房を窓越しに見物した。薩摩焼の技法が外に漏れないように工程ごとに分業化され、一つの焼き物を数人の流れ作業で作り上げているという。静寂の中に緊張感が伝わってきた。

十五代のギャラリーを見学し、売店に立ち寄った。

「どっしりと　横座茶盆の　威厳かな」の色紙の横に置かれた十四代が最も愛したという「青釉横座湯呑」を記念に購入した。

湯呑を包装している店員さんに、私と十四代との関わりを話したら、

「あらぁ、そうですか。今日は十四代の四回目の命日ですよ」と思わぬ言葉が返ってきた。
「奇遇ですね。ご自宅の方角に向かって、お参りがしたいですね」と言うと、売店を出て自宅の方向を教えてくれた。
合掌を終えて頭を上げたとき、自宅の方から先代によく似た十五代が現れた。店員さんが事の次第を伝えて私を紹介してくれた。
「ようこそ、お出でくださいました。十四代にご縁のある方の来訪が途絶えません。父の偉大さを痛感してます。十五代です」と名刺を手渡しながら丁寧な挨拶をされた。
（十四代、十五代、二人の名刺が我が手元に揃った）その後、歴代沈壽官の作品が納められた収蔵庫の案内を受けて窯元を後にした。
大幅に遅れた曽木の滝で予定通り窯元へ向かうかを迷ったが、意を決して計画通りに車を走らせたのがよかった。何事も最後まで、諦めてはならないのだ。
故十四代沈壽官氏に引き寄せられたのかもしれない。

## 歓喜の日

新川　正恵

涼風が木犀の香を心にほっこりしたゆとりを感じられるようになった。
おりしもこれ以上のことはない嬉しいことがあった。

令和五年神無月五日初ひ孫の顔と初声ラインに届く
令和五年神無月五日　こうのとり弦月の日に姫贈りこし
元気よく産声上げし紅の顔　嬰児の笑み見て一人万歳
初曾孫の写真初声送りくるスマホの威力を正に感じる

七日朝一番の新幹線に乗り滋賀に向かった。
久しぶりに家族に会い何やらうれしい。

初ひ孫胸に抱きて温もりと畏れを感じ祥かみしめる
紅の顔手足動かし元気なる初声聞きし　命の尊さ目の前にあり
手足動かし命の限りの泣き声は胸を突き抜け腑に届く祥
ありったけの力出し切り瑠衣ちゃんは紅の顔して光を放つ
子を抱きて母の顔なる孫を見る家族の笑顔の真中に在りて

## 蝶を待つ

ベランダに咲き始めたる藤袴アサギマダラ待つ今日の楽しみ
藤袴佳香はなつや蝶好む　香り嗅ぎみる幽けし香あり
三千キロ旅をするとうアサギマダラにわが心預けてみたい
藤袴きり花にして供えたりゆかしき香のして安らかなりし

バスハイクで八女に行き、石人、石馬の取り巻く日本で屈指の前方後円墳をみた。
特攻機の格納壕を見たり、知らない事ばかりで有意義な体験をさせて頂いた。